

覇者の戦塵1944

# 本土防空戦

前哨

谷 甲州

*Koshu Tani*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

挿画 佐藤道明  
地図 らいとすたつふ

覇者の戦塵 1944  
本土防空戦  
前哨  
目次

序章 前哨 昭和一九年一二月

第一章 地下陣地

第二章 黒尾根中隊

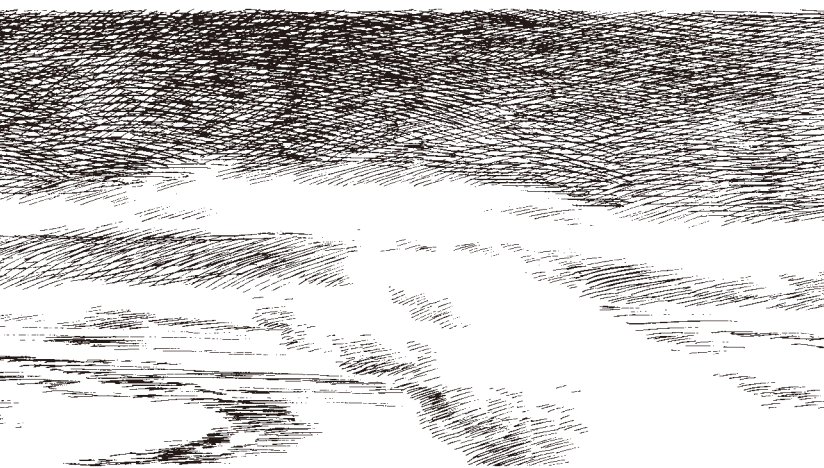
第三章 防空戦艦「陸奥」

10

23

48

79



第四章 抗争

第五章 反撃

終章 布石

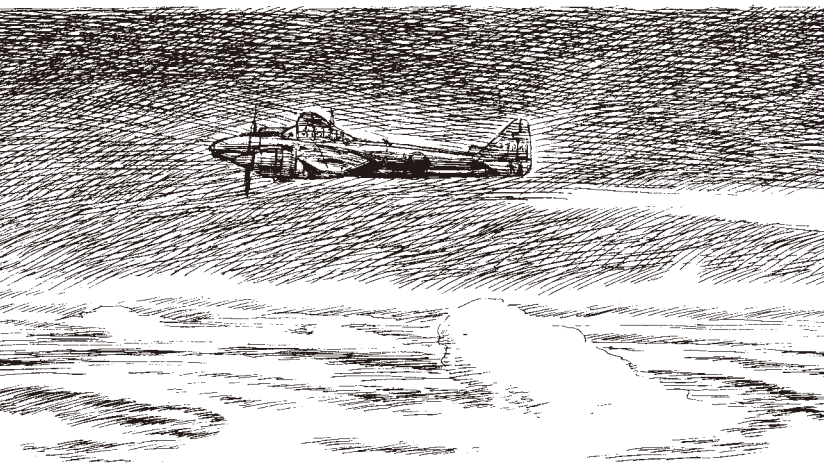
あとがき

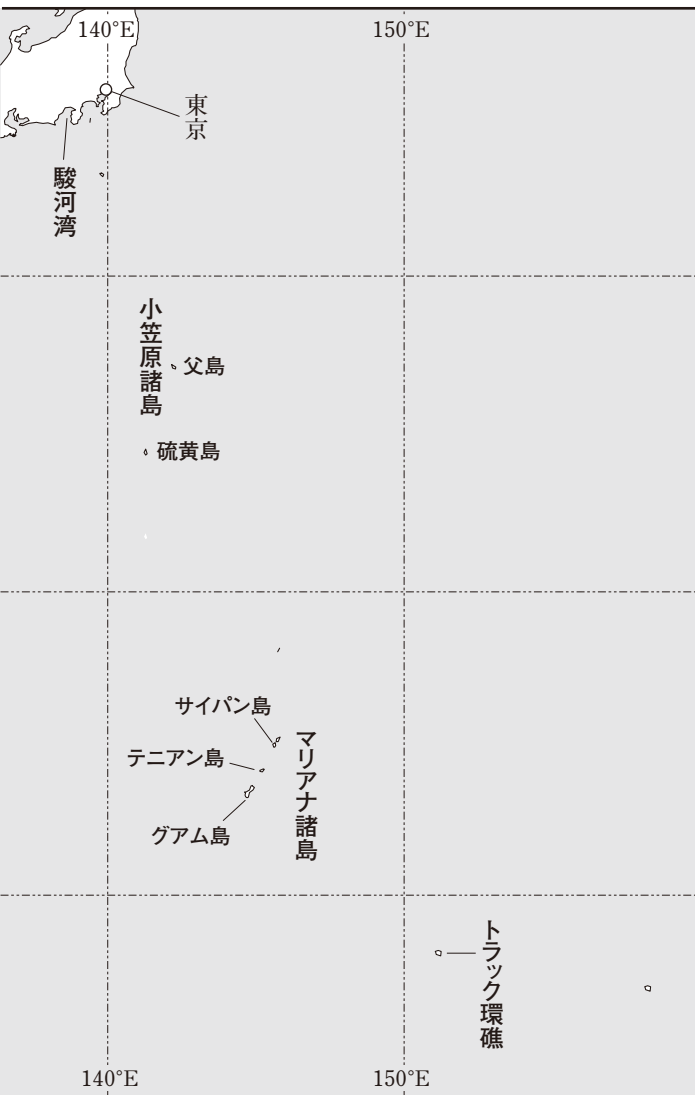
208

195

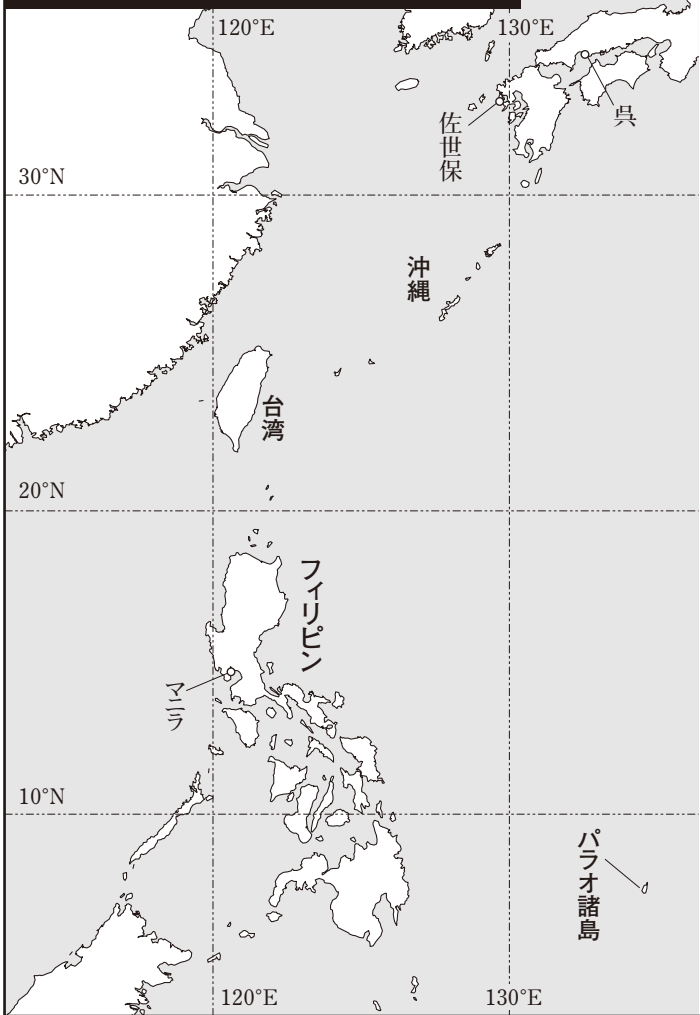
156

118

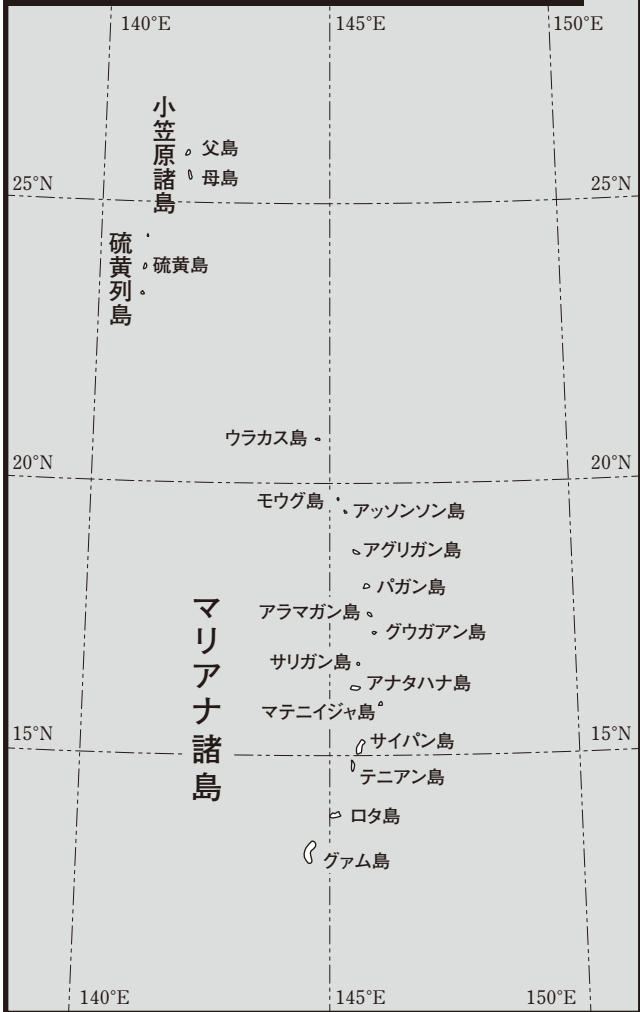




# 北西部太平洋要図



# マリアナ諸島近海図





覇者の戦塵 1944 本土防空戦 前哨

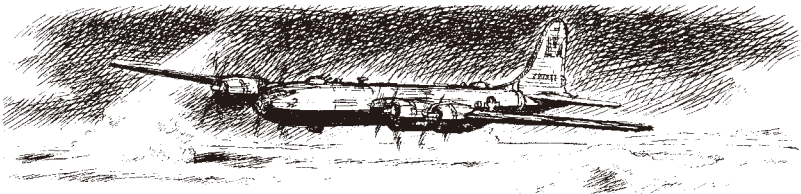
## 序章 前哨 昭和一九年一二月

コールサイン  
呼出符号の更新に気づいたのは、夜明けの少し前だった。

日付がかわって最初の、大規模な敵信傍受になる。テナアンおよびグアムに進出した米陸軍航空隊が、発進前の通信試験を開始したらしい。数十機もの集団が、一斉にコールサインからはじまる電文を打電していた。

コールサインにつづく本文は短いもので、何かの略符号を思わせた。おそらく「発進準備よし」や「異状なし」の類だろう。敵信傍受に機能を特化させた大和田<sup>おおわだ</sup>通信隊では、このところ頻繁に同様の電文を傍受していた。

状況からして大規模な連続発進を前提にした出撃訓練が、くり返されているものと思われる。ただし実際の空襲につながることは少



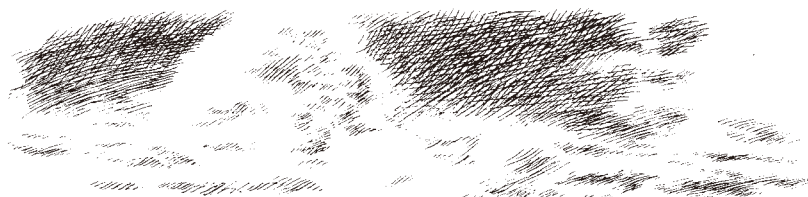
なく、大部分の機体は巡航高度にも達することなく引き返しているようだ。

普段なら毎朝の恒例行事と考えて、手ばやく処理をすませるところだった。ところが今日は、思うように手が動かない。違和感が先にたつて、簡単な略符号さえ読み解けなかった。受信簿に記載された通信文が、見慣れない文字列に変化している印象があった。

コールサインが更新されたのかと、おおつ大津予備中尉は思った。定期的な更新などではなかった。それよりも格段に大がかりで、徹底した暗号の改変が実施されたようだ。昨日までの手法が、まるで通用しなかった。

普段なら長文の暗号電でも、漠然とした意味は推測できた。解説をこころみるのではなく、発信時の状況を想像するのだ。暗号の解説とは別系統の手がかりを、利用するともいえる。有力な手がかりがあれば、暗号の解説にちかい成果がえられた。

それが通信諜報の基本といえるが、今日はそのような「読み」が使えない。コールサインや略符号はもとより、暗号の構造自体が変



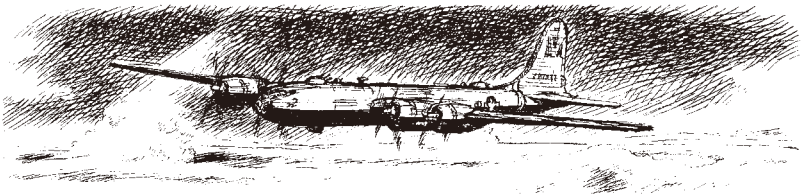
化しているようだ。そのため文字列を眼で追っていくと、かるい眩暈めまいを感じた。

ただコールサインの更新や暗号の改変は、それほど珍しいことではなかった。ことに最近では、頻繁に暗号が一新されている。日本側の情報収集能力が向上したことに、米軍が危機感を持ったのかもしれない。

以前は手つかずだった高強度の暗号も、次第に解読率が向上しつつあった。戦況にあたる影響も無視できなくなっていたが、事態を察した米軍が防諜対策に力を入れはじめた。以後は鼪いたちごっこだった。解読率が向上すると暗号が改変される。そのくり返しだった。

ところが今回の暗号改変は、コールサインや略符号の定期的な更新にとどまらなかった。よくわからないが、暗号の構成自体が変化しているような印象を受けた。理由は明白だった。米軍はあらたな作戦を、手がけようとしている。

すでに一部の部隊は、行動を開始しているようだ。重爆撃機の集団も、例外ではなかった。通常は巡航高度に達したあと、最初の変



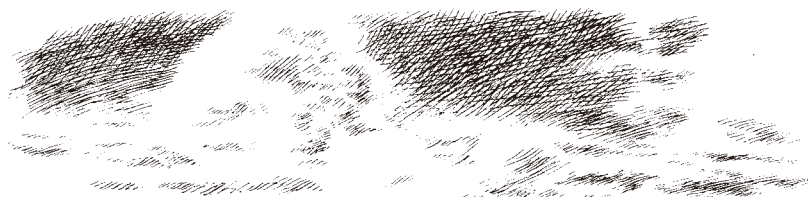
針点を通過した時点で二度めの報告が入る。この時点で入電があるのは、発進態勢に入っていた機体の一部にすぎなかった。

あとの機体は離陸せず掩体えんたいに引き返すか、離陸しても攻撃針路に乗ることなく基地にもどると考えられる。おそらく燃料や弾薬が、充分に集積されていないのだろう。数十機もの四発重爆撃機群を一斉に出撃させたのでは、たちまち物資が底をつく。

そのため一部の機体だけを、次の段階に進めたと考えられる。報告電を送信した機体は、硫黄島いおうやトラックなどを目標に飛行をつづける。ただし実際には、途中で引き返すことが多かった。逆探知によつて攻撃目標を割りだしても、警報が外れることは珍しくない。

ところが今日は、いつもと状況が違っていた。発進前の通信試験を傍受した段階で、殺気だった異様な空気が伝わってきた。電文の交錯や割りこみが多く、かなり混乱している様子がかがえた。その上に二度めの送信は、発進前と同様の規模でおこなわれた。

数十機もの重爆撃機集団が、そのまま攻撃針路に乗ったらしい。通常の訓練とは、緊迫感が違っていた。実戦を想定していることは、



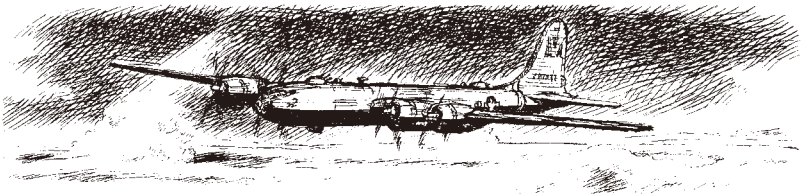
傍受した敵信の端々からも感じられる。しかも暗号が、全面的に改変されていた。単なる偶然とは思えなかった。

はじまったのかと、大津予備中尉は思った。兆候は以前からあった。マリアナ諸島の周辺で、何かが起こりつつある。暗号の解読は停滞していたが、そんなときでも通信諜報は有効だった。通信量の増減や発信源の特定などから、米軍の意図を判定するのだ。

過去の事例を参照すれば、マリアナの動きが推測できる。分析の結果、大規模な部隊移動や物資の集積が継続していることが判明した。さらにテナアンを起点とする哨戒態勢しやうかいが、格段に強化された形跡があった。

実情が目撃されたわけではない。日本軍による航空偵察は不調で、泊地の明瞭な写真は撮影できずにいた。かといって、現地部隊からの情報にも期待できない。彩帆島サイパンの日本軍守備隊は健在だったが、米軍のめだつた動きはいずれも島外で起きていた。

傍受された敵信を逆探知したところ、物資の集積や部隊移動はグアムを拠点にしていることがわかった。哨戒機の発進地はテナアン

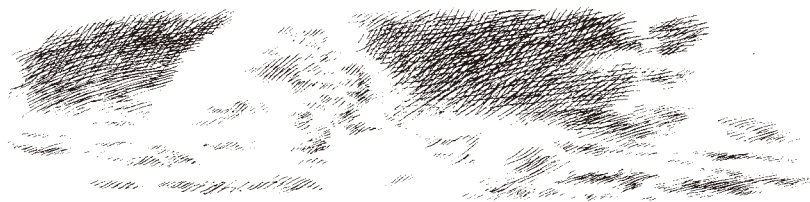


に集中していたが、サイパンは米軍にとって重要な拠点とはみなされていまいようだ。

そのことは、現地状況からもうかがえた。サイパンに米軍が上陸して、すでに三カ月余が過ぎていた。日本軍守備隊は頑強に抵抗し、戦闘は膠着<sup>こうちやく</sup>状態に陥っていた。戦闘が下火になったわけではない。陣地ひとつを奪いあう熾烈<sup>しれつ</sup>な戦闘が、間断なくつづいている。日本軍は島の北部一帯を確保して、米軍の占領地に砲撃を加えていた。このため米軍による飛行場の拡張工事は停滞し、積極的な用にはほど遠い状態だった。米軍もサイパンにおける戦闘を、早期に終結させることを断念したようだ。

戦闘の主力を精鋭の海兵隊から、陸軍部隊に交代させた形跡があった。おそらく米軍は次の上陸作戦にそなえて、海兵隊を引き抜いたのだろう。孤立した日本軍を制圧するのに、海兵隊を張りつけておく余裕はなかったと考えられる。

かわって投入された陸軍部隊は、決して二線級の部隊ではない。充分な量の重火器や戦闘車両を投入しているのに、戦力は逆に低下



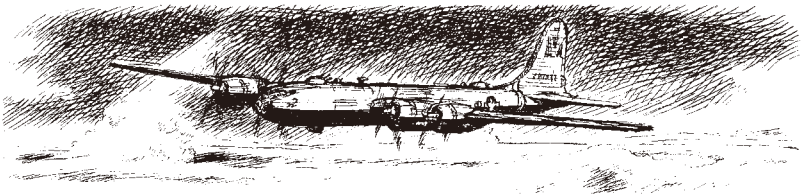
して一日あたりの進撃速度は落ちていた。ときには日本軍の反撃を受けて、戦線が押しもどされることもあった。

一方サイパンから引き抜かれた海兵隊は、休養と補充のあと次の上陸作戦にそなえているはずだ。部隊が抽出された時期に再編期間を加えると、グアムを拠点とする部隊移動に重なる。つまりサイパンで上陸作戦に加わった部隊が、次の作戦にも投入されると考えていい。

——それでは米軍が、次に上陸するのはどこか。

おそらく硫黄島だと、大津予備中尉は考えていた。マリアナ諸島の制圧で、米軍は日本本土空襲の拠点を入手した。だがマリアナから日本本土までは、あまりにも遠かった。米陸軍航空隊の新鋭重爆撃機B29であっても、爆撃行は困難ではないか。

迎撃によって損傷した機体の不時着地として、あるいは護衛戦闘機の出撃基地として硫黄島の占領がいそがれると思われる。日本本土から近く、上陸戦闘には多大な出血が予想される。それでも戦争の早期終結を望むのであれば、硫黄島の占領は避けて通れない。





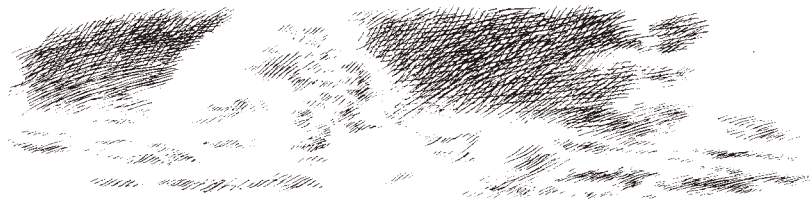
中尉としては、他の可能性は考えられなかった。ただ海軍の上層部や陸軍の参謀本部は、別の考えを持っているようだ。ビスマーク海北部のアドミラルティ諸島や、フィリピン東方のパラオ諸島が有力な候補と考えているらしい。

だがこれは、現実を無視した主張といわざるをえない。フィリピン攻略の足がかりとなるパラオ諸島はともかく、アドミラルティ諸島を占領する価値があるとは思えなかった。実質的に無力化されたラバウルやトラックを、牽制する程度の意味しかないだろう。

大津予備中尉は、わずかに身震いした。

緊張感のせいばかりではなかった。昭和一九年が、暮れようとしていた。冬至からあまり間がないものだから、朝が遅く時間がすぎても明るくならなかった。夜明け前の冷えこみが、ことのほか厳しく感じられる。

あらためて遮光幕の隙間から、戸外の様子をうかがった。まだ闇は深く、曙光しょうこうの兆候はない。傍受された航空無線の発信源は、赤道に近いものの時差は無視できる程度だった。したがって現地は、こ



こよりも深い闇に閉ざされているはずだ。

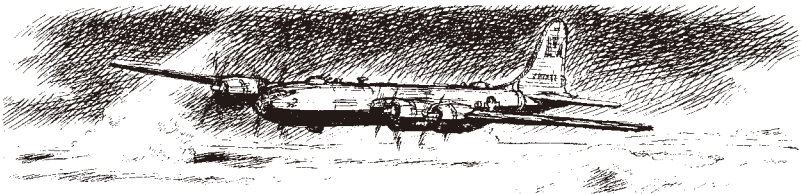
「はじまったようですね……」

声をかけられて、大津予備中尉はふり返った。おなじ班の木谷兵曹こただった。出勤したばかりのようだが、すでに状況を把握していた。その上で、中尉と同様の結論に達していた。それを受けて、中尉も「そのようです」と応じた。

多くの言葉は、必要ななかった。米軍の攻撃目標が硫黄島であることは、木谷兵曹も察している。二人だけの小さな班だが、頼りになる存在だった。すぐに二度めの通信試験が開始された。巡航状態に入った機体から、次々に報告電が入ってくる。

木谷兵曹と手分けして、傍受記録を逆探知の結果と重ねあわせた。結果は予想を裏づけるものだった。針路は確定できないが、爆撃機の編隊は北上しつつある。二〇機前後の集団ふたつにわかれているのは、グアムおよびテニアンの双方から発進したせいだろう。

やはり硫黄島にくるのかと、大津予備中尉は思った。いまの段階で、本土を空襲するとは思えない。硫黄島は過去にもB29による



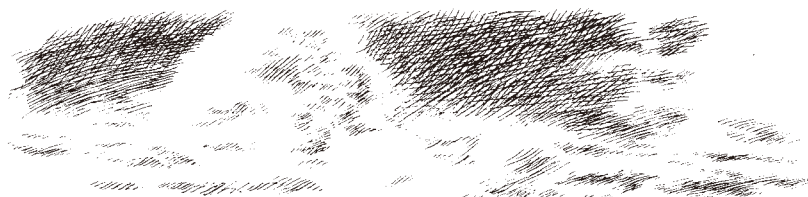
空襲があつたが、そのときは一〇機に満たない小規模なものだった。実質的には日本側の迎撃態勢を探ると同時に、陣地の建設状況を調査するのが目的だったのではないか。強行偵察にちかいが、今朝の出撃はその程度ではすまないはずだ。上陸作戦にともなう事前攻撃で、施設の破壊をねらっているのではないか。

「警報の発信を、具申しますか」

遠慮がちに木谷兵曹がたずねた。かすかな躊躇ためらいが感じられるのは、欺瞞ぎまん情報の可能性を捨てきれないからかもしれない。このところ米軍は、様々な形で欺瞞をしかけてくる。あらたな作戦の発動を思わせる通信異常までが、仕組まれた謀略の可能性があつた。

迷っていたのは、わずかな時間だった。大津予備中尉は決断した。通信隊司令を動かして、軍令部に状況を報告させるのだ。ただし予想される攻撃目標は、小笠原諸島以北と考えていた。本土空襲の可能性を残したのは、万一の可能性を考慮したからだ。

空襲警報の発信によって、国民に危機感を持たせる狙いもある。ソ連領内を発進した米軍機の対日爆撃は、陸軍による沿海州の侵攻



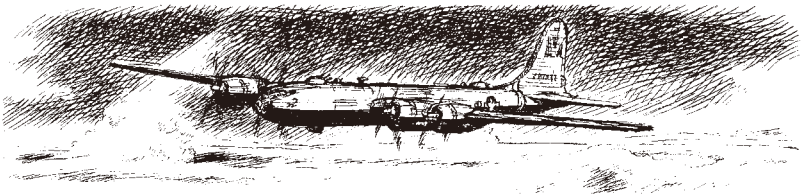
を機に途絶えていた。それ以来、本格的な日本本土に対する空襲はおこなわれていない。

だが米軍機による組織的な本土空襲は、現実的な脅威と考えられる。そのことを認識していれば、米軍による硫黄島の上陸にも説得力が生じるはずだった。ただし時間的な余裕はない。すでに戸外は、明るくなりかけていた。

時刻を気にしながら、大津予備中尉は室内を見回した。先ほどまでは当直勤務の者ばかりだったが、時間がすぎるにつれて交代要員が姿をみせはじめた。海江田司令かいえだも、席についていた。中尉は性急にいった。

「空襲警報の件を、司令に話してきます。それと……朝の定例会議で、米軍の動きについて報告します。お手数ですが、資料を用意していただけますか。一連の動きが米軍の欺瞞である可能性と、硫黄島への上陸についての根拠に質問が集中すると考えられます」

本来なら大津予備中尉が、準備作業を主導するべきだった。だがいまは、その余裕がない。木谷兵曹に支援を依頼して、作業時間を



★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。